

第 33 回(2010. 2. 25 配信)

雲竹齋先生の歴史文化講座 - 「午は馬」

十二支の「午」は、古代中国では「忬(ご)」で、「突き当る」という意味があり、植物の成長が止まって衰えようとする状態の時期をさす言葉だったようである。これを動物の馬に当てはめたのだろう。

馬は、分類上哺乳綱奇蹄目ウマ科ウマ属で、ウマ科の仲間にはシマウマやロバがいる。ちなみに、持久力のあるロバの牡と、牝の馬を交配させたのがラバである。馬は紀元前数千年の頃から人間に飼育されていたという。日本でも古くから農耕馬や軍馬として飼われていたが、日本の馬はアラブ馬など外国の馬に比べて小型だったから、外国からの輸入馬に押されてだんだんと淘汰されていき、今では純血の日本和種といわれるのは、北海道和種(道産子)や御崎馬あるいは木曾馬などわずかである。競馬に使われるサラブレッドは、アラブ馬を主として、近年人間が交配を繰り返して人工的に作った作品である。それなのにテレビや映画の時代劇に出てくる馬はサラブレッドである。笑止！

馬は、昔から人間社会には重要な家畜だったが、最も大きな役割は軍馬としての存在だったようで、世界最古のメソポタミア文明の頃から、戦車(戦闘馬車)が開発されていた。有名なのは紀元前 1280 年ごろ、シリアのカデシュで、トルコのヒッタイトとエジプトのラムセス大王(第 19 王朝)との戦車戦だが、その後戦車戦の技量向上からも、戦闘馬車による競争が盛んになり、エジプト、ギリシャ、ローマへと、時代とともに発展していった。ところで、昔の時刻で 11 時から 13 時の間を午の刻ということから、午前・午後という言葉ができた。そこで、昼寝は午睡とも言うから、3 時や 4 時まで寝てはいけない。

馬鹿と莫迦のバカな話

日本では、馬の走力、跳躍力などその能力の高いことから、大昔より神の乗り物として神聖なものとしていた。そんな理由から、神社に馬を奉納する風習が出来たし、また神馬として美しく飾って祭りに引き出す風習も始まったものと思われる。こういった神馬を奉納することから、絵馬を奉納する風習につながったのである。縄文時代の遺跡からも、馬の化石が出土するから、古くから馬はいたのだろうが、その痕跡は非常に希で、古墳時代に入ってから埴輪や副葬品など急に出土品が多くなる。このことから、東京大学名誉教授だった江上波夫氏は北方騎馬民族説を提唱した。雲竹齋は中東シリアに駐在していた頃、ダマスカスのわが家で江上教授からこの説を伺ったことがあるが、極めて簡単にいえば、アジア大陸から朝鮮半島を經由してやってきた騎馬民族が、大和朝廷を作り上げた、もしくは何らかの重要な役割を持っていた、という仮説である。戦前にもこのような説はあった。しかし、神国日本の純潔性や天皇制を否定するようなものだから、そんな説を公表したら非国民として処刑されてしまうので、公表できなかつたらしい。この先生は、時代が変わったからいち早く公表した。機を見るに敏な人だという人もいるが、学者の世界も早い者勝ちの世界である。

ところで、馬と鹿でバカと読むが、語源は秦の 2 代皇帝に宦官の趙高が鹿を献じて馬といい張った故事から来ていると一般的にはいわれている。しかし、本当は梵語のモハからきた「莫迦」が正しいという説もある。以前、雲竹齋は著書の中で「馬鹿」と表現して、動物愛護団体と名乗る人から猛烈な抗議を受け、大変驚き、また恐ろしい思いをした。小心者の私は、世間に向かっては「中国の故事が捨てがたいのだが梵語から来ているのだぞ」と自分を偽っていつている。

丙午の女性

最近、若い女性たちも競馬に関心を持ってきた。文部科学省が、ギャンブルでは最たる宝くじをやるご時世だから仕方のないところだが、競馬に使われるサラブレッドという馬は、人間が交配を繰り返して人工的に作った作品である。しかも、走るのが遅いと扼殺される運命にある可哀相なものなのだ。昔から、跳ねっ返り娘を「じゃじゃ馬娘」というが、それがアホな「跳ねっ返り娘」と同じ土俵で論じられるのは、馬が気の毒である。もともと馬は自由奔放に暮らしていたはずである。それが枚(ばい)を噛まれ、手綱を引き締められ、鞭を入れられるのだから暴れるのは無理もないことだろうが、馬が大変賢い動物だというのは、雲竹斎が子供の頃、家で飼っていたことがあるからよく知っている。余計な話だが、このギャンブルの胴元である競馬会の儲けは 20%だという。宝くじはもっと上前をはねるのだろうが、昔のばくち打ちでさえテラ銭は 10%と決まっていたものだ。ちなみに、ばくち打ちのテラ銭とは、寺をとばく場にしていたから寺に納める金だったという説があるが、サイコロを転がす場所(盆ごさ)に白い布を巻くことから、縵袍(どてら)という丹前のような衣類を着ているように見えたから、それでどてら銭がてら銭になったという説もある。まあどちらでもいいことだ。

古代中国では、旧暦正月7日は青い馬を見て邪気を避ける風習があった。これが日本に伝わって五節句の一つとなったが、今では七草粥を食べることの方がよく知られている。また、2月の立春に行く「初午(はつうま)」というお稲荷さんの祭がある。お稲荷さんのお使いは、狐ときまっているが、なぜ馬と狐と関係があるかといえは、今から1300年ほど前に、伊勢神宮の豊受の神を京都伏見稲荷大社に勧請したのが、2月の最初の午の日だったからである。ちなみに、日本人は開運招福、殖産興業あるいは火防の守護神としての稲荷信仰に篤いのは、稲荷大神が五穀豊穡の神様だからで、農耕民族の日本人が古くから信仰してきたからである。

日本人はつい先頃まで「丙午(ひのえうま)の年は火事が多い」という迷信を信じていた。昔の暦は干支で表していた。第26回「干支」のところでも詳しく説明したが、「十干」の甲乙丙丁戊己庚辛壬癸と「十二支」の子丑寅辰巳午未申酉戌亥を組み合わせる年や日を表していた。甲子、乙牛、丙寅、壬戌、癸亥となっていくわけだから、この組み合わせは60通りできる。甲子から始まって再び甲子に戻ってくると60年かかることになるから、60歳の方は、暦が一巡して元に戻るという意味で「還暦を迎える」といわれる。古代中国の「陰陽五行説」では、甲と乙は「木」、丙と丁は「火」、戊と己は「土」、庚と辛は「金」、壬と癸は「水」を表している。それぞれ「陽」と「陰」があるから、陽を兄、陰を弟と読ませた。したがって、甲は「きのえ(木の兄の意味)」、乙は「きのと(木の弟の意味)」で、以下同じようにそれぞれの鉱物に「え」と「と」がつけられた。そこで、丙午は「ひのえうま」と読み、「火の兄の午」を意味する。また、方位は北を子として時計回りに十二支を配しており、北が「水」、東が「木」、南が「火」、西が「金」、下(地面)が「土」としている。そこで、丙午はどちらも「火」を示しているのだから、丙午の年は火が重なるから火災が多いという迷信が生まれたのだろう。

また「丙午の女は男を食い殺す」という諺もあった。やはり、これも火災による没落などの災難を懸念することから生まれたものだろう。だから、昔は丙午の女性は婚期が遅れたという。しかし、雲竹斎は、お友だちになってくれるなら、じゃじゃ馬娘でも丙午の女性でも大歓迎である。燃えて困るような財産もないし、女性に食い殺されても惜しくない歳になったから本望だ。